

マタイ 7:1-12 「恵み深く在る」

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚に投げてはならない。それを足で踏みじり、向き直って、あなたがたにかみついてくるであろう。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。あなたがたのだれが、パンを欲しがる自分の子供に、石を与えるだろうか。魚を欲しがるのに、蛇を与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして、あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない。だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」

まことに神に願い求めるならば、求めたものすべてが与えられる。この輝かしい約束が、今日わたしたちに与えられております。恵み深い父である神は、わたしたちをご自分の子として扱っておられる。ゆえに、わたしたちが神に願い求めるならば、すべて良い物が与えられる。それが父の御心である。今日そのように宣言されているのであります。

しかし、この輝かしい約束は、それが間違って受け取られたときに、わたしたちキリスト者に、大きな危険をもたらす恐れがございます。

それは第一番目に、わたしたちが神に仕えるのではなくて、おのれの腹に仕える者になってしまう、という危険であります。

わたしたちが、神の御前で真実な生活をするために必要なすべてを神に祈り求めている限りにおいては、わたしたちは、正しい歩みをしております。

しかしわたしたちが、おのれの腹、すなわち、おのれの利己的な欲を満たすた

めに、求めれば何でも与えてくれる神を、あたかも打ち出の小槌のように自分の手の中の便利な道具として使い始めているときに、わたしたちはもはや神に仕えているのではなくております。

むしろ、おのれの腹が神となり、おのれの利己的な欲が神となって、ほんとうの神はわたしたちの足の下に、このおのれの腹という神ならざる偽りの神のもとに、ふみつけにされていることになるのであります。

第二番目の惧れは、わたしたち神ならざる者が、他人に対してあたかも神のごとくふるまうようになってしまう、という危険であります。

わたしたちが、まことの神に仕えるということを経ずに、おのれの腹という偽りの神に仕えることを続けておりますと、このおのれの腹というものは、ついにはわたしたちを全く虜にしてしまって、わたしたちを他人に対してあたかも神のごとくふるまうようにさせるに至ります。わたしたちが神となってしまうのです。この人間に過ぎないもの、神ならざる者が、神のごとくなるのです。

すなわち、おのれの腹でもって他人を罪定めし、おのれの腹でもって他人を裁き、おのれの腹でもって他人にまったく見切りをつけてしまう。「ああ、あれはもうだめだ。望み無しだ」というふうにして、他人に見切りをつけてしまうような、そんな者にわたしたちがなってしまう、ということであります。

いったいわたしたちは神ではありません。ただのひとです。ですから、わたしたちの認識や知識や理解には限度がございます。その限度たるや実に小さく狭い、貧弱なものであります。そのような貧弱な認識しか持たないわたしたちが、他人を見て、その他人のことがまるですべてわかったかのように錯覚してしまいます。これがそもそも誤りであります。

さらに、わたしたちは神ではありません。ただのひとです。ですから、わたしたちの判断や公平の感覚には限度がございます。その限度たるや実に小さく狭い、貧弱なものであります。そのような貧弱な判断しか持たないわたしたちが、他人を見て、その他人をまったく罪に定めて、その罪定めにはいかなる間違いもないかのように錯覚してしまいます。これがさらなる大きな誤りであります。

さらに、わたしたちは神ではありません。ただのひとです。ですから、わたしたちが未来を見通せる能力には限度がございます。その限度たるや、実に小さ

く狭い、貧弱なものであります。だいたいわたしたちはたった五分先のことすら正しく言い当てることが出来ません。そんなに未来を見通す力を持っていないわたしたちが、他人を見て「このひとはもうまったくだめで望みが無い」というふうに見切りをつけてしまうことができると錯覚してしまいます。これが最大の誤りであります。

このように錯覚にすぎないのに、わたしたちはそれが出来ると思い込んでおります。すなわち、神ならざるわたしたちが神のごとくになって、他人を罪定めし、他人を裁き、他人に見切りをつけてしまうのであります。

いったい、この神ならざるわたしたちが神のごとくふるまってしまうという、この誤りを免れさせるために、主イエスキリストはこうおっしゃってくださいました。

「人を裁くな。人を裁けば自分も裁かれる。

人を裁くと同じ基準で、こんどは自分が裁かれ、

人ははかるのと同じ秤で、こんどは自分がはかられるのだ。

他人の目についている小さな塵はよく見えるのに、

自分の目についている丸太が見えないとは、いったいどういうことなのか。

自分の目には丸太がくっついているというのに、

どうして人にむかって、『あなたの目から塵を取ってあげましょう』

などと言えるのか」(1から4節。柳生直行訳)

これはつまり、あなたは神でないだから、神のごとくふるまってはならない、イエス様からわたしたちへのお叱りの言葉であります。

神ではないのにあたかも神のごとくになってしまっている、このひどい錯覚の中にいるわたしたちの目で見てみますと、他人の「アラ」がいろいろ目につきます。ここに塵がついている、あそこに塵がついている、どんだけ塵がついている。これはたいへんだ、取ってあげよう、というわけです。

ところが、そのわたしたちをご覧になっているまことの神様の目から見れば、とてもそんな他人の欠点どころの話ではない。実にこのわたしたちの中にこそ、罪定めされ、裁かれ、見切りをつけられるべき、重大な罪がひそんでいるのであって、それは他人の塵のごとき欠点に比べれば、丸太ほどにも大きなものだ。こっけいなのは、わたしたちが自分の目の中の丸太に全然気付かない

ふりをして、しかも自分は神のごとくにふるまい、他人を罪定めしているという有様であります。

イエス様はおっしゃいます。あなたは神なのか？ 神でないなら、なんで神のごとく他人に対してふるまうのか？

G.K. チェスタートンは次のように申しました。「この宇宙で何が間違っているというんだい？」「わたしさ！」

わたしたちは、主イエスキリストの十字架の贖いによって、罪赦されて生かされている罪人であります。パウロに至っては、自分のことを「わたしは罪人の頭である」と申しました。このように砕かれた心があるならば、わたしたちは、自分が神になろうなどとは毛頭思いもしないであります。

しかし、わたしたちの心はなんと砕かれにくいことではありませんか！ それゆえわたしたちは、自分が神となってしまうかどうか、いつでも自分を省みなければなりません。特に他人との関わりにおいて、自分が神になってしまっていないかどうか、省みなければなりません。

わたしたちが神になってしまうという危険は、これでおしまいではありません。第三番目の惧れというものがございます。すなわち、自分は神のごとくに他人を支配することができると思ひ込む、という危険であります。

わたしたちは、他人の「アラ」を探して、隠れたところで陰口を叩くということをいたします。これはわたしたちがぜひとも悔い改めなければならない罪であります。

しかし、この陰口の上を行く大きな罪がございます。それは、他人を自分の思いのままに支配することができると思ひ込み、また、そのとおり他人を支配しようとする、という罪であります。

すなわち、わたしたちは良い物を他人に与えることによって、その他人が自分の思い通りになるようにと、意図するのであります。

他人を自分の思い通りに動かそう。そのためにこれこれを与えよう。これこれを与えれば、私の思い通りついて来るに違いない。そう思って与えるところの

良い物は、もはや良い物でありながらも他人に対する「餌」として使われてしまっていることになるのです。

わたしたちが、他人に対して言ったりやったりしている親切や善行が、実のところは他人に対して撒いている「餌」なのだ、というようなことが、ほんとうにあるのでしょうか。

「餌」かどうかは、おそらく、こういうところ明らかになるでありません。すなわち、わたしが他人に対して言ったりやったりしている親切や善行が、かえってあだで返されたような場合、そのことでもってわたしたちが「こんなに親切にしてやったのに、なんだ！」と腹を立てるのであれば、それは実は「餌」であったのです。

一方、わたしたちが他人に対して言ったりやったりしている親切や善行が、かえってあだで返されたような場合でも、なおわたしたちが「報いを求めずに変わらずに親切にし続けよう」と決意するのであれば、それはほんとうの「愛」であったのです。

さてここでイエス様は、他人に対するわたしたちの善行を、くつきり二つに對比させておいでです。すなわち「餌」としての善行と、「愛」としての善行であります。それはこのような対比であります。

「神聖なものを犬に与えてはならず、
また、真珠を豚に投げてはならない。
それを足で踏みじり、
向き直ってあなたがたにかみついてくるであろう」(6 節)

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、
あなたがたも人にしなさい」(12 節)

この二つの対比の中で問われておりますのは、わたしたちの親切と善行の根っこはどこにある、ほんとうの動機であります。

こんなによくしてやったのに、なんでこんなにあだで返されるのだ。もしそう思っているのなら、わたしたちの動機の中にあるのは、親切でも善意でもなくて、実のところ、おのれの腹であります。他人をおのれの腹に仕えさせよう

としていたのであります。他人をおのれの腹に仕えさせるために、わたしたちはもろもろの良い物を「餌」として他人に撒いていたのであります。そのようなとき、わたしたちはもはや他人を一個の人格を持った存在としてではなくって、まるで犬や豚と同じに扱っていた、ということになるのです。

一方、親切や善行が、たといあだで返される結果になったとしても、わたしたちがなお変わらずに親切であり続け、なお変わらずに善行を続けるならば、それこそがほんとうの「愛」であります。なぜなら、見返りを求めているからです。他人を自分の思い通りにしようとはちっとも思っていないからです。そこにあるのは、おのれの腹ではなくって、ただお恵みばかりであります。

主イエスキリストは、天の父なる神様がわたしたちに対して恵み深くあられるように、わたしたちも他人に対して恵み深くあるべきだということを、わたしたちに教え諭してまいいます。

わたしたちは、どの程度、他人に対して恵み深くあればよいのだろうか？ 自分が自分に恵み深くある程度に、他人に対しても恵み深くあるべきであります。

すなわち、わたしたちは、ほんとうなら決して赦されるはずがないほどの罪を、主イエスキリストの十字架の贖いによって赦して頂いている、そういう自分があります。この赦しのお恵みを、この救いのお恵みを、わたしたちは自分というものにまったく当てはめて考えております。この赦しのお恵みというものに、自分は与っているのだ。そういうふうに自分というものを思いみなしております。この救いのお恵み、赦しのお恵みに自分が与っているのは、いったい自分に何か良いところがあったからではない。かえって、自分には全然良いところがなかったのに、ただお恵みによって救って頂いた。それはパウロがエフェソ書でこう申している通りであります。

「あなたがたは、以前は自分の過ちと罪のために死んでいたのです。この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者、すなわち、不従順な者たちの内に今も働く霊に従い、過ちと罪を犯して歩んでいました。わたしたちも皆、こういう者たちの中において、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、ほかの人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし—あなたがたの救われたのは恵みによるのです—キリストイエス

によって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。こうして神は、キリストイエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです」(エフェソ書第2章1から9節)

チェスタートンは申しました。「この宇宙で何が間違ってるというんだい?」「わたしさ!」

わたしたちは、自分が間違っている、ということを知っております。その間違っている自分が、まったくお恵みにより、赦され、愛され、生かされている、ということを知っております。自分がこのお恵みに浴しているのは、何か自分の行いによったのではなく、ただひたすら主イエスキリストを通して現された神の慈しみにのみよる、ということを知っております。

このようなお恵みの中に、わたしたちは常々自分自身を置いて眺めております。

ですから、これと同じ程度に、わたしたちは他人に対して恵み深くありたい。そう願うのであります。これがすなわち、わたしたちにとっての黄金律であります。

「人にしてもらいたいと思うことは何でも、
あなたがたも人にしなさい」

どうかわたしたちが、御父より御子イエスキリストを通して与えられる聖霊に満たされることによって、神がわたしたちに対して恵み深くあられるように、わたしたちもまた他人に対してどこまでも恵み深くあることができますように。そのようにして、わたしたちが、おのれの腹を神とする間違った生き方を免れて、主イエスキリストをとおして現されたまことの神のお姿に似た者となって行くことができますように。祈りましょう。

祈り

天の父なる神様。わたしたちが他人に対して行なう親切や善行が、どうか他人

を手なずけて、他人を支配するための「餌」となってしまうことがありませんように。そうではなくって、わたしたちが他人に対してほんとうに恵み深くあることができますように、わたしたちをお導きください。

わたしたちが主イエスキリストを通して十字架の贖いのお恵みを過去にどれだけ頂いて来たかのか、いまもどれほど頂いているのか、これからもどんなにたくさんお恵みを頂くことになるのか、いま一度思い起こさせてください。

わたしたちは、この赦しのお恵みの中に、この救いの福音の中に、いつも自分をあてはめて、この豊かな恵みの中に、いつでも自分を置いて、見ております。どうかわたしたちが、自分ばかりでなく、他人をもこの同じお恵みの中に置いて、いつでも見ることができますように。

そのようにしてわたしたちが、他人を支配しようとするのではない、他人を思い通りに動かしたいという間違った動機に立つのではない、まことの愛からでたところの、ほんとうの親切とほんとうの善行を、行なうことができますように。どうかわたしたちをお導きください。

主イエスキリストの御名によってお祈りいたします。アーメン